

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2017 楯岡 求美

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



偶然と演劇 (2)

演劇における偶然性

観客の立場から

楯岡 求美

(スラヴ語スラヴ文学研究室)

演劇の特質

↳ 時空間芸術

* パフォーマーと観客が時空間を共有すること

* 一回性

↳ 臨場感 = 舞台と客席との“接触”

* 俳優が舞台から客席を見る

* 俳優が客席から登場

* 「他人」の生活を覗く（第四の壁：リアリズム）

★ 観客からの掛け声（歌舞伎）

★ 拍手

（但し、伝統芸能ではカーテンコールなし
能では、本来は拍手もなし）

問 1 観客参加の可能性

Q. 1 俳優が客席に乱入可能ならば、
観客の舞台への乱入は許されるか？

Q. 2 客席に乱入する俳優に観客は
介入可能か？

Q. 3 結果に対し「侵入者／介入者」に
どこまで責任があるのか？
(演者・観客ともに)

問2 テキストと演出

~演出の裁量~

Q.1 原作への「忠実さ」をどこまで守る？

- ・著作権の問題（劇作家vs演出家）
- ・テキストとは素材か？

Q.2 セリフやストーリーがわからないことは許容されるのか？

- ・観客は予習不要なのか？（プロの観客？）
- ・テキストの音声化？
- テキストとの対話とは？

1. 演劇を論じる難しさ①-1

↳ 「演劇言語（芸術言語）」の修得

* 英語と同様、理解のためのトレーニングが必要

ex. 野田秀樹の「テンションの7つの型」

* 歌舞伎の女形、黒子、だんまり、小道具...

* セリフの代わりにの歌、パントマイム...

Q. 文楽、能はつまらないのか？

わからないのか？

1. 演劇を論じる難しさ①-2

と観賞する (学習) 機会が少ない

* 時間とお金が掛かる

* 日常的に触れることがない

= 空き時間にふらっと見に行かない。

⇔ 映画館、美術館、コンサート

* テレビ・ネット中継がほとんどない。

(または時間が決まっている)

* 見たい芝居を上演していない。

⇔ 欧米のレパートリー制、ロングラン制

1. 演劇を論じる難しさ②-1

現代演劇の記号論（文法）が発達途上

*セリフや表情をはじめ、衣装、照明、装置など芝居のあらゆる構成要素がメッセージを発信。

ボガトウイリョフ「演劇の記号論」
（『民衆演劇の機能と構造』未来社）

*現代アートにおいてコードは常に刷新される。
= 常に未完成／発達途上

*演劇の名のもとに多様な（無限の）様式がある

1. 演劇を論じる難しさ②-1

↳ (日本では) ふらりと見に行かない

- ・ 偶然見た芝居が良い確率に依存
- ・ 観客の演劇言語の読解能力が身につかない

↳ 1回性：繰り返したり再現したりできない

* 時間と空間に限定された芸術

- ・ 俳優・観客双方の体調問題（天候問題）
- ・ 上演場所が変わると作品も変わる。
(地方公演、再演でも、場所が変わると違う)

1. 演劇とは

論じる難しさ②－3

↳ 完成形が無い（開かれた芸術と観客の役割）

* 観客の反応に左右される

- 映画のフィルムは固定（再鑑賞も可能）
- 個人の体調、経験
- 集団としての「観客」

⇒ 俳優の演技に直接影響を与える。
(テンション)

2. 観客は芝居になにを期待するのか？

(1) 俳優

＜会いに行ける＞芸術

「一人の男がなにもない空間を横切る。

それを誰かが見ている。

そこに演劇における行為の全てがある。」

ピーター・ブルック 『なにもない空間』 晶文社

- 人間の波動のようなもの。Live感覚
⇒ マスとしての観客

2. 芝居への期待

(2) 物語

- ① 本を読む代替（あら筋）
 - ・ あらすじの手引き
 - ・ 原作との比較 ・ VRとして
- ② 等身大の物語（教養小説的）
 - ・ 共感、共鳴（批判も含む）
 - ・ 泣ける、笑える、新しい価値観を知る
- ③ ちょっと変わった体験
 - ・ お化け屋敷のようなテーマパークのアトラクション的な体験 ⇒ 演出

2. 芝居への期待

(3) 演出

- ① 表現／構成の奇抜さ (物語①、舞台装置)
- ② 装置の美しさ (現代アートとの混交)
- ③ 人間関係、コミュニケーションのモデル。
学習・実習教材 (平田オリザ)
- ④ テキストとの対話 (dialogue)

2. 芝居への期待

(4) ハプニング

Live感覚

- ① 非日常、眼前で生起するものの表現
時に観客への攻撃（予想外、想定外）

- ② 日常の拘束・抑圧からの解放
 - ・同時進行（現実）の確認
 - ・“安全な”ミス、逸脱を見つける快樂

→ 癒しとしての演劇

3. 対話としての芝居 (1)

↳ だれとだれの対話か？

1. 舞台上の役柄の人間関係

2. 舞台上の役者と観客

3. 演出家（俳優）とテキスト

↳ **マイエルホリドとブレヒトの異化（挑発）（演劇史）**

演出—舞台（俳優） ⇔ 観客

3. 対話としての芝居 (2)

4. 観客個人の意識の中の対話

セリフの意味を選択するのは観客

三浦基『おもしろければOKか? 現代演劇考』

五柳書院

と 言語体験は「固有のもの」

ヨシフ・ブロツキー『私人』群像社 等

3. 対話としての芝居 (3)

と ヨシフ・ブロッキーノーベル賞受賞講演 (1987)

(『私人』群像社)

Если искусство чему-то и учит (и художника -- в первую голову), то именно частности человеческого существования. Будучи наиболее древней -- и наиболее буквальной -- формой частного предпринимательства, оно вольно или невольно поощряет в человеке именно его ощущение индивидуальности, уникальности, отдельности -- превращая его из общественного животного в личность. Многого можно разделить: хлеб, ложе, убеждения, возлюбленную -- но не стихотворение, скажем, Райнера Марии Рильке. Произведения искусства, литературы в особенности и стихотворение в частности обращаются к человеку тет-а-тет, вступая с ним в прямые, без посредников, отношения.

もしも芸術が何かを教えてくれるとすれば（それはまず第一に、芸術家自身に教えてくれるということですが）、それはまさに、人間存在の私的性格でしょう。芸術はもっとも古い—そしてもっとも本来的な意味で—私的活動の形態であるがゆえに、どう転んでも結局、自分が個別で、独自の、二つとない存在であるという感覚を持つように人間を鼓舞し、人間を社会的動物から個人へ返信させるのです。多くのものは、他人と分かち合うことができます。パンも、寝床も、恋人でさえも。しかし、例えば、ライナー・マリア・リルケの詩を他人と分かち合うことはできません。芸術全般、特に文学、そしてとりわけ詩は人間に一对一で話しかけ、仲介者ぬきで人間と直接の関係を結びます。だからこそ芸術全般、特に文学、そしてとりわけ詩は、全人類の幸福を熱烈に擁護する者や、大衆の支配者、歴史的必然の宣伝者たちに嫌われるのです。

ヨシフ・ブロッキイ『私人—ノーベル賞受賞講演』沼野充義訳，群像社，1997年，pp.9-10.

3. 対話としての芝居 (2-2)

シェイクスピア 『コリオレイナス』

<https://www.youtube.com/watch?v=BZ4Az7MO3y0>

ブレヒト 『ファッツァー』

https://www.youtube.com/watch?v=I__WNJl68xQ

チャーホフ 『かもめ』 (オペラハウス版)

<https://www.youtube.com/watch?v=hVDUFhOISU0>

3. 対話としての芝居 (4)

と三浦基「演出」 (『おもしろければOKか』)

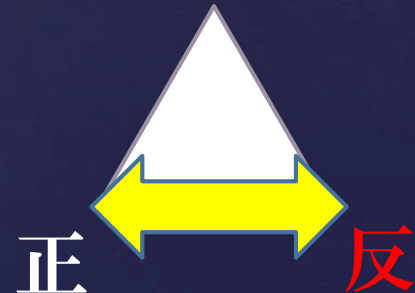
「ダイアログとは、二人以上が発話する**対話**あるいは会話というように考えてよい。

わざわざ定義したのは、実は、私は劇においてダイアログはあり得ないのではないかと
思っているからだ。」三浦基『おもしろければOKか？現代演劇考』五柳書院，2010年，p19.

(合)

と**対話** (dialogue)

- * 異なる意見を戦わせること。
- * 別人格のぶつかり合い



弁証法的対話のモデル

3. 対話としての芝居 (4-2)

と三浦基『おもしろければOKか』 「演出」

「わからなくなると思われるのであれば、その
思いはセリフの意味内容がわからなくなっている
という視点からでしかない。

それは物語、つまり話の筋がわからないとい
うことである。」

三浦基『おもしろければOKか？現代演劇考』
五柳書院，2010年，p20.

➡言葉そのものを聞いていない？

と俳優の「体」を見る側の担保とできるのかどうか

➡観客は舞台上の俳優に向き合っているか？

3. 対話としての芝居 (5)

⊗ 戯曲の「ダイアローグとは、モノローグの応酬
だということ。」

→ 舞台上の登場人物（俳優）は相手に話して
いるのではない。

=セリフを聞かせる相手は観客

⊗ 俳優が発したセリフと聞き取った観客の間で衝
突が起きる。

⊗ 登場人物間の“会話”は**錯覚**

4. 対話の解体 (1)

↳ 聞き取られたセリフ（ことば）は聞き手＝観客の脳内でイメージ展開され、次の言葉との衝突を起こす。

↳ 近代：コミュニケーションの際のコードが共有されているという前提。

- ・ 理解可能性
- ・ 進歩（改善）可能性



↳ ストーリー、言葉の破碎、コードの隠匿

4. 対話の解体 (2)

不条理劇の登場 (世界観＝ルールの喪失)

↳ ベケット『ゴドーを待ちながら』

↳ ベケット『わたしじゃない』

不条理劇の実現

イエリネク『光のない。』

<https://www.youtube.com/watch?v=A6lpH1yDRk8>

※ 聞こえた言葉から何を連想するのは
観客次第

問2 テキストと演出

観劇という宿題 ~演出の裁量~

Q.1 原作への「忠実さ」をどこまで守る？

- ・著作権の問題（劇作家vs演出家）
- ・テキストとは素材か？

Q.2 セリフやストーリーがわからないことは許容されるのか？

- ・観客は予習不要なのか？（プロの観客？）
- ・テキストの音声化？
テキストとの対話とは？

ディスカッション課題

問 1 観客参加の可能性

Q. 1 俳優が客席に乱入可能ならば、
観客の舞台への乱入は許されるか？

Q. 2 客席に乱入する俳優に観客は
介入可能か？

Q. 3 結果に対し「侵入者／介入者」に
どこまで責任があるのか？